

特 10

939

箱根現慶仇討

福光館梓

箱根權現覺識討緒言

大閤殿下乃御内にて鬼と稱れし勘平もお勝が戀の情を引れ無懸

の毒手よ敢無き最期父が無念を晴さんと未だ前髪如初五郎か力と

頼む十次兵衛の惜や深底へ落こちの便を失ふ飯沼が旅寐の難よ奥

州路世と忍ぶ身と白河の九十九が娘の切なる望も一念變ぜぬ元治

の氣性を見貫く新左衛門押付とぞの智引出に與へる刀の覺えの業

物坐行車は天運循環箱根に於て圖ども松並主計が義心に依り恨み

重る幸助と討て本意を達せしえ荒人神の名にし負ふ曾我殿原に劣

ぬ功天晴奇代の孝子なりと好事忽ち門を以て以前に勝る出世を爲

No. 9071
LIBRARY





しと汝に出で汝に返る是ぞ勸善懲惡の報むに依りて究達の結果を
示す一美譚舊き茲に新しく目先以變て梓よ上せ婦幼の爲に端書
して此一丁と塞ぐと云爾

賣ると體よ目利を定めた板元の上田屋が索よ依て

柳葉亭繁彦

箱根権現覽警討

特10
939

○秀吉公大坂城を築かせ給ふ事并顯如上人石材を献上する事
劍を撫し惡み視て曰之彼翁んぞ敢て我に當らんやと是匹夫の勇一人に敵する者あり劍之一
人の敵學女に足らず願わくは万人の敵を學むんと云ふ是万人を敵するなり然を漢の高祖沛
より起り馬上に三尺の劍を提げて王位に昇り四百年の基を開くと是至極の大勇とよそ謂べ
きなり爰に豊臣秀吉公と天下麻の如く亂れ人心絲の如く纏れ未だ鹿の難が手よ落ると言を
知ざるに際し命世の才を以て四海を併呑し世を青天白日の太平に治め給ひ上下鼓腹して万
歳を唱ふる中にも治に居て亂を忘れざるの格言を守らせ一の要地を見立て堅城を築くべし
と思召す其折柄は六條本願寺十一世の顯如上人太閤へ勤め進らせけるは御居城を定めさす
ると大坂の地は比ふ處之なく候抑も大坂と西三十三ヶ國の都會として四民輻輳の所とい
ひ西に之滄海の固めあり東には關りの險あつて要害も亦甚はたよろしくいへを爰に御居城
を築かせられんと實に御子孫繁榮の基を存しなれども幾重にも大坂御居城しあるべくいと
申ければ太閤も點頭せられ何様大坂を故信長公を曾て御居城居させられんとて明智光秀に
間竿を打せられしともあり然を和僧の申さるゝ如く大坂に居城を築くべしと有ければ上人
君彌よ大坂に御居城築かせ給ふとあらむ愚僧も應分の御手傳仕つるべしと申に殿下否く
や夫と御無用城を築くと勿く容易からぬとよて先第一が石札なり而して其入費も夥多し
き處御身出家の儀されし右様のと御存志も無て斯日ふ成んが先其儀は御無用たるべしと仰

六
 らるゝに上人飯令何程石材御入用ある共必らず調へ差上ん是非に愚僧へ仰せ侍られ度と申
 に殿下然らば和僧の心に任せ申さんと有けるにぞ上人必得候と申て退散と夫より上人諸國
 の末寺へ觸を廻され此度太閤秀吉公大坂表に御城を築かせ給ふに依て石材一式を御手傳致
 し候へば遠國島々に至る迄門徒たるべき者早々大坂表へ石材を運ぶべしと有ければ諸國の
 門徒本山顯如上人よりの御觸なりとて各々深山險岨の嫌ひなく自身行て夥多の石を堀取船
 に積込で日々大坂表へ運びしるを儘かの内に早御城普請あえ餘る程石を積上たり秀吉公
 此由奉行の者より聞し召れ流石顯如上人なる哉是まで叡山南都の法師等處々の軍さお加勢
 せしと有ども顯如上人の骨折斯の如くなれば後日我天下を取共法跡は者此城に弓を射と有
 べからず實お門徒の威勢の凄まじく又殊勝なる者哉と大いに悦ばせられ夫より掛の役人
 を仰せ付られんとて先奉行にと片桐市正且元小頭にと飯沼勘平加藤幸助等と定められ其外
 石工番匠の諸職人を幾万人と多く集られて彌よ大坂城御普請をぞ始めさせける然るより太
 閤間等の打様な委細片桐へ御差圖あ及ばれ且元其如くに細張等を始めし處圖らず先年光
 秀が經營せし杭木に堀當りしかを且元實お名將の深慮と萬事斯の如く符合せし者かあど獨
 り感嘆あして居たりしと云や

○御城普請の諸役人水邊にて酒宴の事并飯沼勘平勝女と契る事
 秀吉公の仁政に因て治まる御代は御普請なれば諸工力を盡して勵みける故段々と工事歩取
 り石垣も略出来しける且時しも七月の孟蘭盆なれば暑の強きに堪かね諸役人等皆淀川の邊
 へ打集ひ酒肴を調へて納涼の宴開き或と語り或は笑ひ暫の間と鳴も止ざる餘々快々あ皆

七
 々意外の大醉をなし前後も不覺お興トいり
 ける其内に夜を良更て波間に映る月影いと
 い清げく見へし折しも加藤幸助飯沼勘平の
 兩人思とさ其座お臥し轉び腕を枕に假寝を
 する共あし寝入たる其間も有早人々の
 歸りしかを幸助此物音に目を醒し勘平が能
 寝入し体を見て儲く強ひ醉様な率起して
 一緒に連行んや勘平大人よ起給ひねて一
 聲掛しが不圖思ひ返し否く此人こそ平常と
 り思ひしと思ふ人なり假令軍功あるあもせ
 よ太閤の御意に入と有て祿も三千石を頂戴
 し人を人と思とす兎角威張散して居ると奇
 怪なり我とても豈無手柄なしと云ふよを非
 ず然るに我は祿も彼に及ばず僅に千二百石
 にて在と思へば口惜次第なりヨソく彼
 寝入て居るこそ幸ひ置去にして歸るべし
 る時と彼必らず夜明までも目を覺さず普請
 場へ赴くとを夫が爲め延引し奉行片桐殿の



手前も少しは不首尾と相成べし是好報怨なり然じやくと一人點首遂に同役の勘平と打捨己を一人假屋を指てぞ立歸りける跡は勘平只一人暫し寝入て居たりしが不圖目を覺し四邊を見るに何時の間にか幸助を初め皆くの者居らざれば大いお驚き早速自分も歸らんとして出掛し處那處に有し一叢の薄動さしを思とす是を見て有處お不思議や亦年も二八か二九からぬ最と美しき少艾が平くけ帯の其まよて如何も臥床を忍び出意中の人を待が如きの風情をなし懷中より小硯出して何やら薄葉へ書記し程遠からぬ向ふの川へ流しければ勘平心お思ふ様是正しく狐狸の術ならん我今此處に只一人醉臥て在を付込て誰うさんど仕たる成べしいでや目お物見せて吳なんど少艾が側らへ突と立寄汝れ何者なれを斯る夜更に此處へは來る定めて狐狸の類ひるらん早く正体を現とさよし然なくば打殺して吳んぞと天地に響く大喝一聲怒鳴り付れを少女恐れて物をも得いえず戦き怖れて逃廻るを勘平扱こそ己れ遁しとせじと刀を抜て付廻せを少女今と足も進まず踏と傍へ倒れけるにぞ勘平駭き扱と狐狸にては無りしや近頃以て氣の毒のとを爲たりしと急ぎ水を口に含ませ種々介抱なしけるに暫く過て漸くお人心地付しを勘平心靜お御身如何なる者あて在するや氣をば儘に持れよと云に少女妾と更々怪しき者ならぬ是より向ふふ當りたる多田野と云る其所に住かも然まで賤からぬ長者の娘あて名をば勝女と申し頃しも去年七月の今日に慈母を失なむ便り少々の身と成て漸く親族の者の世話お成り憂き月日を送りし程に今宵ふと實母は事を思ひ出し寮所を抜出今えしも孟蘭盆の功德よ亡き慈母へ手向の爲念佛記して此川承へと流しぬなり便り無身の遣る瀬お死體然の者と思し召御許し下され給へかしと語れば

勘平始終を打聞き扱く神明なる心な貴女斯孝心と有らふと我鬼も角を能きに計らい得させ申さん我え則ち御城普請の役人飯沼勘平と云者なり頼て秀吉殿下此所お御居城し給へを我も亦此所へ住居せん然ば其時貴女を召出きて吾左右にと差置ん先づ夫までと云乍ら跡と思案の外話しに飽ぬ妹脊を結びける斯て夜も追ふ更け渡れば又の逢瀬を契りつゝ其夜は其儘別れけれ共飯沼勘平今年三十三歳あて而を十三歳に成る初五郎といふ怪もあり其上妻もまた裏若死に是より後は毎夜くに出逢し是ぞ身の大害と成にける

○加藤幸助勝女お横戀慕の事并加藤幸助飯沼勘平を欺し討あする事

扱も飯沼勘平夜毎に假屋を出て何時も深更まで歸り來らざれば幸助是を不思議お思ひ一夜窺のお勘平が出行跡を付規ひ淀川の流よ添て下り行處一人の少艾西の方より川邊傳ひに此方へ來り勘平と出合て然も嬉しげ且染物語りするにぞ幸助扱こそと思ひ遠くより其少艾を見遣けるに花の顔せ月の眉實に絶世の美人おして衣通姫小野小町も斯やあらんと思これければ暫時イみ見取て在しが見付られては如何なりと傍の薄お身を隠し聞耳立て居りし内に勘平お勝の兩人と右と左へ分れしかば幸助熟くお勝を羨ましく思ひ何卒手段を廻らして彼女を我手お入んそのと心お兆す煩惱の犬は追せ立去る然れど良死思案も出さればよしく翌夕こそ兩人が立別れ歸る其處を女を捕へて口説ん者と思ひ定めて先其夜お假屋を指てぞ歸りける斯て翌晩幸助早くも身支度をなし又此處へ來りて見れば勘平既お來り居て暫く彼の少女を相待居たるに今宵と如何しけん待せ暮せ彼の少女影だに見ぬねを幸助と氣をかり焦ら居たる折柄西の方よりやつと來れば大いお悦び容子何と見て在に勘平少女に

打向ひ何故今宵と遅りしと問を少女今宵と家内の者早ふ寝ずして人目の關に過らる夫申
 必也惡々思召すやと言ふ其言葉の終らぬ勘平ひしと抱き付き暫し談話も絶たりける幸助
 の此体を見て彌々戀慕の心堪へ難く現をぬかして見居たる所に勘平お勝に別れを諭し夜明
 なば人も知べしイサ諸共に歸り申さん疾く勤むる言葉お勝も是非なく立去しかば勘平
 も假屋へ急で歸りける然程お幸助と少女の後を慕ひ行き頓て近付聲をわけ我は太閤秀吉公
 の家來加藤幸助と云者あり今宵川狩をして今歸る處思は貴女に邂逅て花顔柳姿に氣も魂
 ひも身に添せ可憐假の情有れかしと抱き付しをお勝と手早く振放し妾と母の病氣に因り本
 腹を願てん其爲に神詣でして只今歸る所あれば何卒許容してたび給へといへ共幸助いつち
 聞ず欺り給ふと勿れ神詣でするあらば何故寐衣の儘にてと出られしと察する忍び違ふ戀
 人や有ん疾く言ねと責付しにお勝不然さやうのと夢にも存せせ全く母の病氣の爲神詣で
 を致せしあり其所退て許容されよと云に幸助聲荒らげ貴女然様に陳する共其戀人は我とく
 知れり欺り給ふこそ淺暮かれ此處より外へと遣まし是非とも望みを違んせとて既に斯よと
 見えければお勝コハ所詮遁れぬ場とは思ひけれ共何とて此場の危急を逃れん者とて成
 程御推量の通りにはいへ共妾固より其人を好みてのことに非を義理お遣られ餘儀なく隨ひい
 なり然る間其人の手さへ切て妨げに爲る者いねば貴郎に從ひいどて何苦しからぬ儀い
 へど其人の居る内と御心情に隨ひ難し欺りはやすすアラ可愛の主よあう何卒其内能き御返
 事と云捨しまし足を早めて遁出しけるよ幸助元來女子に逢ふてと正体を無き程の者なる

故偽らるゝとは露しらす今女の言ふて勘平さへ無を我も隨はんと必定なり幸ひ我未だ妻
 も無しよし然を勘平に出逢ひ真劍の勝負して女を早く我手に入んと思ひしが又思ひ返し否
 く彼は手の内勝れし者あり容易く勝負してと叫ぶまふ夫よりと彼女を奪ひ取り何國へ成と
 を立退んこそ好かるべし然ながら我今此處を立退ば母の難儀何許あらん夫も又忍びざるな
 り杯と種とよ考へしお能度心を定め所詮欺り討して本望遂るにと如ざるなり明の晩をを過
 すま玄然なりくと獨り點首爰に害心を生せしこそ是も同じく身を亡せず種と成よけれ
 實にや人若き時を誠しむると色に在と幸助と前後の辨へも有ややく儘か一人の勝女が爲に
 曲れる心を爰に起し遂お誠しめを打破り殘忍の業お及ばんと爲ると淺猿くそ又恐のしけれ
 斯て其翌日と幸助宵の中より身支度を調へ替ての場所へ赴きて勘平が来るを今や迎しと特
 掛たるに神ならぬ身の是非もあく勘平斯とと夢にも知す例の如く涼みあがら團扇杯使て淀
 川の流れ清さを打見遣ふらりと此方と指て来る處よ後の方より誰やらん足指するよと
 思ふ間をなく一刀の秋水閃めくや否や肩先目掛て大袈裟掛に切付しにぞ勘平是とと身を關
 くは早四五寸許り切込れたり勘平振返り見てコハ幸助己れ何の意趣有て欺し討をば掛たる
 ど何故尋常にえ勝負せざる卑怯き汝が振舞かなと云様此方よりも切付しが然と肩先の重
 傷に腕利す其内一の太刀を切掛られ流石の勘平も既お仆れんと爲ける必死を極め再び太
 刀を合せつゝ一上一下と火花を散して切結ぶ斯る所へお勝何心なく來りし所今此体あるを
 見て大いお駭き如何はせんと思へ共小刀一本も手に持たれを何と爲べん儀もなく只途方お
 奪て居たりし内遂に勘平切伏られて其場へドツと仆れたりお勝は口惜さ限りあて我を忘れ

て幸助が腕目掛て囃付しに幸助お勝を小脇に抱込み見付られては大事なりとて勘平の絶息

○飯沼勘平遺言の事并遺子初五郎復讐を望む事

此こと忽ち其筋へ聞えしかば翌日檢視として生松五郎兵衛桂万兵衛と云る兩人此處へ來り
切伏られし者を見るに飯沼勘平數ヶ所の傷を負て臥居けれを大い駭き然も未だ息少し有
けれを其儘戸板に乗て奉行片桐が前へ差出したる所市正自身に介抱して仔細を尋るに勘平
眼を見開き苦し氣なる聲を出し某し夜前淀川の邊りへ涼みよ参りし處後より何者ぞぞ知れ
ず肩先へ切付しに因り振顧り見れば加藤幸助にては何の意趣にて斯の如くなるやと尋ねけ
れ共何とも答へずさぞ然も依り某しも幸助に渡り合左の耳より肩へ懸て切付申いあこれ此
上は片桐殿の御執成り蒙り悴にては今年十三歳なる初五郎に替を復させ給ひらば武士道
も相立是れお過たる御恩これ無は是ぞ今生の願ひにてはと述べれば市正委細を打聞給ひ其儀
と少しも氣遣ひ給ふを我主君お宜敷願ひ得さすべしと有しかを勘平莞爾と打笑ひ今に始り
ぬ君の御芳志忝け無くこそ存せざるなき早し思ひ置といとす此儀許り願ひありと云て三十
三を一期とあし歸らぬ旅にぞ赴きける斯て市正太閤の御前へ出此中委細言上よ及びし所太
閤甚だ御立腹在り悪き加藤が什業りお其儀ならむ仕様こそ有ん先鬼も角も彼が屋敷へ知ら
せ遣ことべしと有ければ即ち飯沼が方へ知らせし處妻は聞て仰天し餘りれと云ふ泣もせ
ず只茫然として有ければ家を來谷十次兵衛と言者是を諫め殿が御事と早やても詮ふれ無く此
上と御一子初五郎様御座いされと拙者御後見やして復讐仕つらん然ば一刻も早く此儀御上

へ御願ひ立然るべくいひとやとに妻も此諫めを聞て少し心を取直しけれ共初五郎切て十五六
歳にて有あらば然のみ氣遣にも思とねと何を云にせ年の行ぬに困るなりと打歎死居たる
其所へ初五郎直と進み出母様然のみ歎かせ給ふお兒小腕よいへと父上が警加藤幸助何其
儘にして置べきや恨みの刃思ひ知らして父様の法の手向お爲さんと云を谷十次兵衛大い
に悦び流石と飯沼家の令郎梅檀と二葉より芳を誠に駭き入ていあり警を復に亦や腕と繼
是もの只一心の劔金鐵の如くあていへば假令敵手鬼神の如しと雖も何難きといへきや母
堂様必らぞ歎かせ給ふべからず某し當年耳順の坂を越ると雖も其昔し先君に従ひ諸の軍
に大功を顯せし谷十次兵衛にていへを率是よりい上へ願ひ誓時お警加藤幸助が首提げ來ら
ん初五郎様御支度有とサモ勇み立て述べたりしは天晴忠臣とこそ見ゆけれ

○秀吉公左文字の一刀を初五郎に下し賜る事并初五郎十次兵衛復讐首途の事

然程に初五郎十次兵衛に伴これ太閤の御前へ出亡父が仇を報玄度旨願ひし所太閤一聞し
召尤ももの願ひなるが初五郎當年何歳も成や十次兵衛十三歳に成や太閤然らむ後見の者
有や十次兵衛初五郎未だ幼年おい間拙者後見の心得よ御座い太閤然る上と随分堅固よして
首尾能討課すべし勘平と所の合戦に軍功を顯し適れなる勇士ありしが或らざるに命
を果せし條残念にて有し早や父が仇を報玄本國へ立歸るべし其時先知と相違なく當行べし
と有て御手づから金子并お左文字の一刀を下されしかば初五郎主従有難しと御禮やて頂戴
し願て御前を退出して夫より片桐の屋敷へ行き且元よ面して敵討の印書を乞ける所且元
願に消ひて直様

太閤秀吉公の御旗本飯沼初五郎元治家士谷十次兵衛を召連れ親の警加藤幸助と討んと
消途に及びぬ條勝負の儀宜敷頼入の警首尾能討以上と早本國へ送り歸さる可者之
天正十二年七月
片桐東市 正判

右の通り認め渡ししけれを兩人受て屋敷へ立歸り斯る上と一日も早く打立べしとて早速用意
に及び頼て吉日を撰び来る廿五日こそ宜しからんとて乃ち此日を首途と定め借當日小成け
れを初五郎母と離別の盃盃取替しけるに母は涙に暮乍ら離分無事あて本望を遂げ目出度歸
參を致さるべし是許りの樂しみぞと暇乞する言の棄に流石初五郎を堪かねて思ひ涙に沈
みければ十次兵衛是と諫め目出度御首途に臨ませ乍ら女々敷御振舞こそ心得を以早疾々と
勤めし程に初五郎名は更に盡ねども勇士の十次兵衛氣を引立られ頼て兩人何國を目途
と定め無く旅の空母に別れて出行ける

母親の歎きも道理あれと十次兵衛の忠義察し遣れて可哀あり未だ年端も行ぬ初五郎を
預り氣こそ壯健な老の身の行末如何と案考らるゝと口お言ねと内心に是を氣遣ひ彼
を思ひ二つには母の歎きを思ひ遣る杯餘所の見る目も痛としければ太閤よを深く憐
みを垂させ給ひて扶助米等下され悴が歸りを待べしと最と有難き御意を下され又幸助
が母と門與拂ひに成れしとのや

扱を又加藤幸助と奈良に少しの由縁有を先其處へ便り行暫くの此處よ身を匿し居んと思ひ
お勝を肩に荷ぎ一儘行々松原迄來りし所早夜も白々と明々渡るもぞ幸助お勝を肩より下し
和主が昨日の朝云た通り勘平と我手に懸て討取たり然る上と最早心に懸ると有まぞ就てこ

是より奈良に赴き由縁の者の方へ立越て其上兎も角もせんと思ふなり悦び有やノウお勝
といやみに脊を叩きければお勝是を聞て何と返答もなく許り間を伺ひ遊んどすれば幸助駭
き引止め這と开も何と働らさける大反女遊んど爲とも何遊とべき何れへ行とて斯遊出せし
を疾々言ねと逼りしかばお勝無念の齒齧を爲けれ共斯る大悪人と有上からは無益逆らひ事
言甲斐有まぞ夫のみならず殺されんと疑ひなしと思へを憎き大悪人戀人の恨み一刀あり
興報とて暗々討る可と思ふ心を押匿し成程和君の仰の通り今と更々心お懸る雲もいとねば
此上と兎も角も能に計らひ給ひねらしと云に幸助怒りを治め然ばと云て二人連立先に
立後に爲つゝ行道々もお勝幸助を口惜く思ひ且又今宵奈良の宿へ連行かれなを無体よ戀慕
を仕掛られおん然とて何渠が爲よ身を汚さんやなどと思案を定めながら心も無く行は
ふ愛の所も闇り峠道さへ細き山間に樹木の森々と生茂りて青猶闇きは山の名よとひのぬ一
方と谷深として覗くと爲れと勿々お底も見ゆる此處へ差掛りたる其時しも流石女性の淺
墓心此處にて本望を達せん者として後より幸助が足を取と其儘谷へ引落さんと爲けれ共大兵
れ幸助争で女の手腕に引落さるべき一寸も動かす何をするぞと回顧る所をお勝幸助が羨添
を引抜き眉間を目掛けて切付けれを幸助微り傷を負ひ乍らお勝が手腕を確と執へコリヤ汝れ
何と加する何と爲とて大悪人二世と契りし戀人の勘平殿を手に懸たる貴様か憎しと思ふ
故今切付し一刀こそ切て戀人への手向あり最早我命惜めらす勝手に爲れと云ながら身を問
ぬ齒を齧締無念の眼に血を注ぎ幸助を發打と睥睨しお勝は幸助是を見て扱と汝れ昨日云しと
と欺りよる斯とと知らず誠と思ひ勘平を殺し我も難儀の身と成まこそ残念なれ思へを憎さ

女め可愛さ餘りて憎さ百倍イザ殘忍目見せて吳んすとて林の中へ引摺り行ふより殺しの慘酷しされ勝は苦しき聲と上げ假令爰あて殺さるゝ共魄は此土お止まつて和君に愛目を見せんとぞ云つゝ遂に狂ひ回りて死したりける夫より幸助と血を挿拭ひ南都春日の社家へ尋ね行暫時と茲に居たりけれ共永くは茲も居難くして夫より奥州の兄半太夫の許へ立越んと思ひ頼て奥州路指てぞ急ぎける

多田野の里なる勝女が家にてはね勝が歸り來らざるよ依て所々尋ねれども知れず然るに翌日聞り昨よ女の死骸ある由聞傳へ尋ね行て見し處果してお勝が死骸朱よ染て有けれを大いに驚き殺せし者誰なるかは知れされ共早速其筋へ願ひて死骸をす受最厚く用らひを爲けるとなり多田野の里と云ふ今の太仁村なりしとぞ

○初五郎主従奥州へ行事并十次兵衛川水に溺るゝ事

然る程初五郎十次兵衛の兩人思ひ運らるとに船路の勝手宜けれと誓と必定中國へ下りつらん先手始お其國々を尋ね可しとて乃ち備前岡山へと赴ひさ夫より備前備中を様々に尋ねけれ共手懸りよし兎角する内に其年も立又翌年も過去て初五郎既に十五歳と成たりしが早三年も諸々方々も尋ね歩さしに依て太閤より賜はりし金子も残り少なふ費ひ果し其上十次兵衛不圖煩ひ出しければ困難云ん方なく然れども初五郎挽みなく看病せしよ依り日數六十日程過て漸々十次兵衛の病氣本復お及びける扱十次兵衛す様幸助と早備前備中お居らざると覺ゆひあり承まこれれば彼が兄某しある者奥州白河の邊に居るとの事に付彼も亦奥州へ参り居らんも知れずさす夫に就ては只今より奥州へ御供致さんと存せざるされ共路用に事と

欠き進退谷りてい程お御痛はしくといへ共召る御衣類を只今賣却なし夫を以て彼地へ赴かんと存じし許させ給へ是も亦御父への御奉公某しも亦斯の如くおひなりとて頼て初五郎と自分の衣類を一纏めあし遂に是を賣却あして路用を整へ頃と十月の寒空に主従二人肌も薄着の憂き旅を野も伏し山に寐ながら行々既お奥州へ早二日路と言ふ處まで到りし處其日の夕がた有る川の邊に出しを主従此處に一宿せんと爲たりしが兎まれ向ふの岸へ打越んとて夫より兩人手お手を取て渡りし處思えず十次兵衛足を踏外し深みへ突と横様お倒れしにぞ初五郎是はと驚き慌てあがらお抱き上げ辛ふして向ふの岸へと上りたり斯て初五郎十次兵衛を様々介抱けれども息を絶々にて其上着たるものも浸と濡けれを勿々物をも云す初五郎もはとく當惑なし暫らくは途方お暮て居たりし所其傍邊お荒家一軒有けを是幸ひと思ひ其所まで十次兵衛を荷ぎ行表より戸を敲きて我々と旅の者なるが老人前ある川へ溺れ既よ命も危ふき間向卒内へ入れ火に煖て給とるべし生々世々の御厚恩あり茲明てたべと云ければ主の老人立出て是とくく氣の毒なるとありシテ其老人は何方に居給ふ是へ連れて來らるべしサアくは是へと肯ひしかば初五郎やつと生たる心地おし臥たる十次兵衛を抱へ行んと爲しけれ共流石小腕の哀しさ勿々揚らず主人の老人を頼みて漸々荒家へと擔ひ入れ夫よと老人藁を焚て十次兵衛を暖めしおは是よ依て十次兵衛少し正氣づきたり良有て十次兵衛サモ苦一氣ある顔をなし初五郎を熱々見涙を流して中様最惜や若旦那足この乍ら此十次兵衛を杖とも柱とも思されしお何なる武運の盡果一にや十次兵衛早此處おて相果べし御歎死有んとお察しけれ共是も宿世の縁し成ば何程言ても甲斐有まじ就てと此上御堅固にて誓に

廻り逢給はい首尾能討て亡君の體憤晴し給ふべし私し此處にて死する共必らず御氣を候ませ給ふな此儀計りがお願ひなりと言聲も早微あるにぞ聞居たる初五郎顔をも得上せ伏居たりしが流石未練不泣せやられず苦しき胸を押鎮め我大坂を出しより今日今迄も頼みとせしと只其方一人なり然るに今其方に別きて何とせん我また斯る年暮と云へ警の行方も知らぬ内別るよとの哀しけれと言は十次兵衛押返して這と言甲斐あきと曰ふ者かあ佑と此十次兵衛居らざれば警と討ぬと覺しけるのか郎君も飯沼家の若君あらせや武士に似合ぬ其御一言斯る卑怯の御量見なら十次兵衛今より主従の御縁を切やさんと息を喘々やけれ初五郎打點頭成程尤もの一言なり假令幸助何國如何なる處に居とも探ま出して討負せんと言聲聞て十次兵衛覺せず手を上初五郎様夫であそ飯取氏の御子息ありと言かと思へば心の挽みに其儘息と絶たりける初五郎と死骸み取付悲歎の涙に暮ければ主の老人是を慰め御歎き然るとなれ共何日迄言ても歸らぬ事此上と遺骸を少も早く埋めや跡念頃に用ふるそ宜れとて家の裏の地面へ埋たりしと聞も哀れのと共なり

○老人初五郎へ衣類を恵む事 初五郎九十九新左衛門の家へ奉公に住込事 斯て老人と十次兵衛が亡骸を取片付夫より初五郎の濡たる袴を取せ藁火を焚て是を乾かし又粥を煮進めなどして様々お待遇けれ初五郎は限なく悦び御情何時の世よかと忘れずん我と先刻より御聞の通り歎を現ふ者あれを押し付け本望達せし上と其節御禮や返すくも辱けなしと厚く禮を述べたり其夜と經を讀誦して寝道すに打過ぬ初五郎と相あり初五郎主よ別れを告げれば老人涙を押し拭き長の御旅と言ひ行衛も定かある在ねを今一日の御逗留

あれ左程御急ぎよは及ぶまは是非と言に初五郎の其御芳志は有難けれ一日も早く隠人に回り逢たく存すれを早御暇をすべし御禮の程は勿々み只今茲にてと盡し難し然らむと言ば老人も詮方なく古單衣を取出し貴殿殊の外お薄着なり風引とて成みまじ危末乍らも是など錢別お差上べし首尾よと御難討の其時までも愚老若世お存在居らむ再び御目に觸るとやさん然と随分御壯健でと思ひ込たる挨拶初五郎も嬉し涙にむせびつゝ勇を立てぞ出行ける然るに初五郎十兵衛に相談れ心細く道を辿りて過行共何處も縁家の有よも非す又懇意の者とても有ざれば如何とせんと種々思案を回らし乍ら既と奥州路へ入り白河の近邊へ到着しければ道端の菓物など商賣してある店へ立寄て私しと稼せんとて尾張國より遙々當地へと参りし者なり然る處縁家もなく懇意の者もいはねば近頃押付の願ひなれを何奉公口の御世話下されたし此事偏に願ひいと腰を屈めてや客れば主聞て扱々此お人は仕合者なり我等出入の旦那なるが兵法の師範を成さる九十九新左衛門様と言御方あり恰此御家にて此節草履取を御尋ねれば是へ早速御目見に違やさん御首尾の上と此方おて御判すれを判代少々請たし念の爲かれを始めあやあり御承知なるやと言けれ初五郎是は御念入のと如何よと承知致し何程にてを苦しからず免も角も御取成願ふなり主人左様ならば一刻を早と連やさん然とて言て夫より髪等結せ頼て同道して違行けるに幸ひ新左衛門在宿あて初五郎を見汝と何國の生れにて年と何歳なるやと問けるに初五郎私しと尾張國の生れにて年は十五歳お成やいと答ふ新左衛門能き者なり先々置て見ん随分出精すべしと有けれと初五郎有難くいとやて乃ち新左衛門の方に止りける斯て新左衛門初五郎をば八助と呼せ

十二

章履取を勤めさせけるが初五郎元來才發の者故主人を始め家内の者までにも氣に入れ諸事
油斷なく働死居て師範の家なれを若も幸助の入來るともやと常に心を付て居たれ共似たる
者さへ來らば然と心の中より斯く多人數入込されを其内出會も知るべからず此家も辛抱して
居るこそ好らめと思ひしかを彌々勤めを勵み夜に及べを我部屋に入て亡父勤平并十次兵
衛へ手向の經手と誦し居ける心の内こそ神妙なれ然るに初五郎生れ付ての美男と言殊も年
も未十五歳の若衆作りにて有けれを今年十四歳なる新左衛門が娘か々と言者不圖初五郎
に想を懸いと淺からぬとは思ひしが流石に年の行さるを然明白にも言出し兼一人胸を焦
して居たりし内早其年も暮翌を天正十五年の上當年三五の春を迎へしを切て思ひの
端なり共知らせて欲と思ひ詰め或日何やらを認め人知れず初五郎が部屋へ入置たりしに初
五郎部屋へ立歸り見れを艶書と覺しく上書あ八助殿へかよよりと手跡も美事に認め有るこ
ゝ如何よと不審ながら開きて見るゆ

君の住邊りの草よあとしてと見せをや袖に餘る白露

と有けを共初五郎心に思ふ仔細も有る兎角知らぬ顔して捨置ぬ然る處又々一兩日過て思ひ
の丈を細々と認め送としが是も亦其儘にして置し處おかく斯迄心を示しても返事なきよそ
口惜けれ此上と押付て行んオ、然と娘め心の只一筋よ或夜家内の寐息を窺ひ忍び出て初五
郎が部屋へ行し心こそ又憎のら思とれけれ

○九十九が妻娘の様子を立聞する事并初五郎おかよを賺す事

然程に娘れかよと誰を頼むべき者もなく直に口説ん者と夜に紛れて初五郎が部屋の戸を

十一

と開け其儘側へ走り寄是八助よと揺り起せを初五郎と起上り是こく御續様何故夜中に見
苦き此部屋へと御出有しぞ早々御歸り遊ばせと云をおかよは涙ぐみ何の故と之夫りや聞
ぬぬ是迄數多の文送りしお只の一度の返事もなく其上今の其一言情あいぞと恨し女的身
として恥しくを斯して來たのよ何として此儘直に歸らりかヤヨ八助と云ながら取付纏り
て放さねば初五郎と容を正し見る影もな死下郎めを然程に思し召下さると身に取付添けな
くはは共然乍ら此身に些思ふ仔細のひて今と心に任せされを何卒潔然思ひ切せて給は
れのし何卒と云ければおかよは猶も摺寄て女の口より言ひ出し今更斯と云るゝならん
所詮我身は是迄なりと泣出しけるに初五郎も持餘し然程に思召し給へらん又何とどの思案
を致さん先々今宵は御歸りあれと漸々其場を取成て寢所へこそと歸しける然るゝ其翌晩を
來りし處お母と疾くも斯と知り跡より付て部屋の戸口へ耳を寄せ様子如何おと聞居たるよ
娘と此事夢おも知ず初五郎お打向ひ夜前那程まで口説ども返事のなきこそ情なけれ今宵
は色よ返事をと云に初五郎膝立直し斯様のと旦那様へ聞ぬなば吾身計りの御前様おを御
難儀あらん壁も耳と壁もいへを早々御歸りあさるべし世儀と逆も叶ひやさ早ふくと
急立ければおよは泣く居直りて飯令嚴父の御耳に入如何なる憂目お逢ふ逆も其方故なら
厭ひはせし吾身を憎しと思はれなを寧ろ手に懸殺して給更ゝ怨に存せぬなりと云れて初
五郎と這は勿体なき事仰せらるゝ者かな御前様を手お懸殺し夫で此身と何としませよ此儘
と御免下さるべしと云其聲の下よりもおかよと懐剣を取出し然てはお前を頼みとせぬ父様
母様許して給南無阿彌陀佛と稱へつゝ既に斯くと見ぬけるにぞ初五郎驚て押し止め然程に迄

二冊

も思し召御事なら今宵夜を早更の程に明晩御出なさるべし必らせ相違は致すまじと聞て
見付られてと悪かりあんとて忍びくみ寐所へとこそは入にけれ

○おおよ思ひ煩ひの事 井 おおよが母八助を尊養子と望む事

然る程一初五郎思ふ様令嬢が志ざして嬉しけれと誓を覘ふ此身として猥りのとと最初より
せまじと心願立し程なれば夜前と漸と賺して歸したれと今宵は何と言ひ紛らさん鬼やせん
角やと思案を爲して居たりしが宜しく今宵と部屋を堅く鎖し出せざる様あすべしと
心強くも其夜は堅く戸を鎖して居たる所娘と斯とも知らずして日暮を待のねて既に部屋へ
と行見れとコハ如何と押と敲けを明ば社内を覗きけれと燈も消て聞のりし程お詮方々も
其夜と寝所へ立飯りける諸翌晩あり又と到り見る處今宵を夜前の通り殿しく閉て在しか
心おろくと偕と八助は欺されしかと悲歎の泪に心も乱れ其夜も悄乎我寐所へとよと歸りし
が是よりしてと唯鬱として煩らひつゝ食物さへも食べざるにぞ双親と大いに驚き早速醫
師を頼み種々療治をさせけれども療治の効と少しも見ゆず猶と次第く衰へて今と醫師
の手術を盡しよ因り母親の歎き一方ならず種々に思案を運らし或日夫新左衛門に打對ひ義
少御願ひ有り御開届け下さるやと問れて新左衛門是とまた改まりたるやとかなッテ其願
ひとと何事なるや疾言ふべいと有けれと妻は別の事もいとす實は娘かよのとよては病氣
の様を熟く見やに勿く常体の病とは得よと思これやすす妻先頃より心を付て居りし處娘
の病氣全くは八助に懸想をし言寄ると雖ども八助是を開入やすさき夫故想ひ焦れて出し病と

三冊

存じし就ては賤しき者との御蔑視も有可れと何卒渠を娘の養子とせられ此九十九家を薬に
御繼せ下さる様此儀吳くの御願ひあては然し時と娘の病氣早速平癒あす耳ならず妾存じし
よ八助とて木石にもいとす然るに身を謹み斯を心を固く用ひ居ると是見所ある者と覺ゆい
又親の慾目かと存せねと此近邊お娘數多ある其中よもかよよ勝れし者有とと覺ゆやす
に一人娘のとにといへば逆ものと渠が氣に入し者を聲に取せ度存トいへば此儀御承知たま
はれりしと娘を思ひ家名を思ひてやければ新左衛門是を聞何様娘が八助を慕ひ居るとのと
と我も疾知れり又八助が人品を見るに賤しき者に非ず其上弟子ととの對手を爲して試るに
適れなる手の内渠自身尾州の百姓といへ共決して然にと非ざるべし此家の聲に取て不足な
況者あり幸ひ明後日と松前氏の試合に付門弟を殘らす遣ひし我も亦夫へ參る間其後に八
助へ右の由を申聞せ先内祝言を取結ぶべし夫への披露と追て吉日を撰み沙汰なさん鬼も
角も内祝言然るべし道理ありと承知しければ母は大いお悦び早速の御得心有がたく存じし
然様ならば娘へ先早々申せんとて夫より娘のもとへ行新様くなりとやけれと心おのよ此
一言を聞より顔色頓直り露の朝日に解るが如く瞬之間に氣分豁然と開けしかば早速に病
床を立出其日遅しと待居たる程なく當日も成ける故母も娘も勇み立髪を結び浴をさし其
内よ早日も暮て新左衛門松前氏へ行しかば母と下婢へや付諸事萬端の用意を調へさせ夫と
り娘へも白小袖を着せ母も衣服を相更め最美しく出立たるにぞ初五郎此体を見て何とを合
点行ず居たりし處奥より八助殿御召ありと聲掛られ何事ならんと出行しお娘は白小袖にて
綿帽子を戴き上座に直り母も衣類を改め直中お坐り其外島臺鏡子など飾り有ければ初五郎

四廿

不審更み晴未座お蹲まりて御用の儀りと聞かれを母言辭を正し八助殿近よ寄べし苦しか
 らず借斯様の形容噤不思議にも思ふらんが旦那様其方が心を御見抜有て其方を今宵娘のよ
 の養子と爲らるゝ由御申付故今晚其方と内祝言を致さするなり夫への披露は追て吉日を
 撰み取行なふなれを近つて娘と祝言の盃蓋致さるべし斯やする其方は謹み深々娘が心の
 切なるをも避て猥りのともあらず其上武術の手續と云ひ天晴なるこの御事にて幸ひこの家
 に男子なけれを是お因ての御考へなり此上は娘と中睦しく九十九の家を相續し給はるべし
 いざ近くへと有ければ八助發と両手を付是と有難き仰なれ共由縁も未だ詳らかあやも上ぬ
 僕れを斯程に迄も御最負下さる九十九新左衛門様とやての人も知つたる御師範は貴き御家
 を何として我々如死下郎匹夫は繼せられんやと仰らるゝを憚り多し此儀と御免下さるべし
 とやを母と打消して然ほと遠慮に及ぶ可らず此方より許して祝言致さするに違背は却て不
 禮成べし早々祝言致さるべしと言聞されて初五郎思て差發と差俯さ思案の体にて有しうば
 母之氣を急是八助疾々返事して給と追詰られ詮方あくも初五郎頭を擡げ御意お背にといと
 ねど此身に之些思ふ仔細もい程ふ此事はありと御免をとや出せを母と訝りやア其仔細とは
 何事ぞ國元よ言號めても有のかと言を初五郎はコリヤ御無躰なる御尊かな思ひも寄ぬ其仰
 せと膝組直すを母は見遣り然らむ此家を不足お思やるかと言顔を見て初五郎又しても勿体
 なき仰のち不足等とは何として然らむ何故ニ、夫と夫とも何ぞ其身には此母娘のすを女
 と侮どり云ぬと見ゆれと言ねを其方の爲悪し疾々言ねと急立ける

○新左衛門家お傳くる一刀を八助よ渡す事 并 初五郎本心を語り奥州出立の事

五廿

此時初五郎少しも憶せず仔細如何にと仰有
 れども此儀をかりは仮令一命を召るゝ共又
 何様の御責あるとも打明し難くは間何卒御
 用捨下さるべしと何度問も同宏と繰返し
 くやよぞ母を今さら詮方盡死思案に暮て
 居たる折し娘は手早く懐剣取出し既お自
 害と見ければ母は遽て押し止め短刀拾取膝
 立直し娘出のした然ながら未だ仔細も聞ず
 して死すると犬死同様なり八助が心底し聞
 し上死と共運きとには有まじ暫時と待てや
 娘よと言つゝ八助に打向ひ今見る如く娘
 あと其方が心次第まで死する覺悟をせしと
 見ゆたり仔細に依て娘をば殺す共又生す
 共開て何れ共其方は隨意生根を居るていざ
 返答をと言葉忙しく問ける所へ頓て門の戸
 を押開き主人新左衛門衛と内よ入い奥の座
 敷へ通りて見れを娘の俯伏し歎く体母と短
 刀を片手に持又八助と両手を組何やら考へ



居たりのし有様合點行すと不審となせども流石と物にあらぬ新左衛門笑を含みて中様我今
 宵早くも歸るべかりし處振舞の宴に時刻を移し今こしも歸りて見るに此体なりしと未だ後
 片附の出来ぬと見ゆたり勝手の手を嘸勞れん乞行て見んナウ妻と云つゝ立を妻は押し止め暫
 し御待下さるべし良人にも疾御承知の通り今宵娘と八助の内祝言を結ばん爲萬端の手等調
 ひし處八助一圓合點致さる斯様く恚々とし仔細を物語れを新左衛門殘らば聞て打茶じ
 八助一命お替ても語らぬと有上から尋常のことにてと語るまじヨシ然ば我一ツの考へ有
 と云つゝ一間へ入たりしが金作りの一刀を手に初五郎の前にて置て諸中様此一刀之先祖
 より傳はる九十九家の重寶系圖とも我が魂ひとも言物あり是を汝お與ふる間必ら免忽に
 思ふ可らず疾受取れと有ければ八助不審ながらも忝けちと押敷けを新左衛門重ねて言様
 我今此刀を汝に譲りたれば我魂は即ち其方が魂ひあり然れを其方何様や難き仔細あり共
 包まず語るべし必ず他言は致すま率承まらんと有ければ初五郎も其理に賣られ成程御
 心を込らせし御一言身に染み渡りて覺ゆ一命お抱はる儀あれ共今と何をか包みやすん然
 を委細を申上んと容を更め實と私しと親の報警を思ひ立十三歳の時本國を出身を謹み不淨
 を受す魚肉も食せせ只一心に本望を達せん念願にて此段御推察下さるべしと思ひ入て云
 ければ新左衛門と又問やう然を其方と何國の生れにて如何ある人の家來にや實の姓名何
 どかやといへば初五郎と首を下げ父と秀吉公の御旗本飯沼勘平元勝と一子同苗初五郎元
 治とやと某しなり以來然様に御承知をと言を新左衛門は扱こそと打駭さ忽ち禮を厚くして
 や様初より様子有げとは思ひ居れ共斯様の譯とと露知らず是迄盡せし不禮の段平免して

給くるべし然るも其初五郎殿何故我方へは奉公させしぞ仔細を疾々語り給へと問きて初五
 郎は然をあて以警之同じ殿下の御旗本ある加藤幸助とや者にて是を尋ん其爲に頃は去ぬる
 十二年の七月家來十次兵衛とやを召具し國許を出夫より先備前岡山お居たりし處幸助の兄
 某しある者遂此御近所に居ると云ふと知しのを去年十月岡山を出立なし既に奥州へ二日路
 と云時或山川を渡りし處十次兵衛過つて水に溺れ相果しかは是非あく所の賤が家へ立寄其
 家の老人の情にて遺骸は其處に葬りたれ共後は某し唯一人何所を便らん當もなく唯幸助が
 奥州お由緒有とのと因夫を目當に此館へと奉公致せし其始終の艱難と言語に勿々盡し難
 しと委細を語れを新左衛門如何も其方の推了通り其幸助といふは我門弟加藤半太夫とい
 ふ者の實の弟の由めて先年此地へと來りければ此幸助と云者生れ付ての人非人おて兄半
 太夫が妻に戀慕を仕掛事願れて人に評判を立られ是が爲當國を逐電せしかを早東國へ足を
 向る事有べからず今は其方在轉此處お居給ふ共本望達すと叶ふまを今暫くは留めずさん心
 なれ共其方が大事を聞上と留めずも如何なり疾爰を打立て目出度態を討給て其時娘が望
 みをも叶へて下され此事頼みやありと云ば初五郎と打點頭斯て日數を送り居ると亡父への
 不孝此上なし然を仰に隨ひて直様出立やさんと頼て支度を調へしかを新左衛門夫婦娘まで
 名残は盡ねと言葉を揃へ然ば随分首尾よくと云一中にも新左衛門は金子五兩と刀一振取出
 し是を寸志の贖けなりと渡せを初五郎押敷け成程本望達する上とは息女おかきとのを妻よ
 中受ん必ら吉左右侍われ武士の一言違ひとせせと云ふ聲も亦勇ましければ娘の悦び大
 方ならせ暑さも増る夏の旅随分お忍付らるべしと言つゝ所持薬入を取出し裏に手早之一

昔の歌を書添ける

八廿

別れても心ひとつの旅衣幾重かさねて山路行けん

初五郎是を請取悦び勇んで出行ける

○初五郎白坂の宿めて熱病を煩ふ事并初五郎善への路用を薬價も道果す事

既に飯沼初五郎と九十九が館を首途あし夫より相州小田原に少しの知音あるを便り先小田原へ赴かんと思ひけるが道めて目も懸らんとを恐る太閤より拜領の刀と九十九が貫ひし刀とを濫紙包にして脊負腰には只自分の一刀を横たへ陸奥の山又山を打越て早下野の境ある白坂宿の言ふに着けを初五郎と此宿泊りまが如何爲しけん其夜俄あの大熱を發し苦しみ悶へ家内を狂ひ回りしかを亭主驚き一人旅の者死なれて難儀ありとて早速醫師を呼び見せし處醫師と診て是大傷寒あり先々薬を與へんと夫より百般手當を盡しけれども効なく翌日になり翌々日に成ても飲食さへ咽へ通らぬ其内段々日数を經熱と少し覺けれ共肉落て骨と皮計り成しのを今と兩便とも自身めて行くと叶とねを醫師は此上と人參を用ひずば命も危ふるべしと云ふ亭主の命さへ助る儀ならば人參なりとも苦しむらも見れば此人と由緒も有様あり人參の二兩や三兩費す共不都合の儀と無るべし然ば其如くせんとて夫より人參を取寄飲せけるに流石年若の者人參の効も因て日増し快氣しけれども何分大病にて有し故未だ飲食充分あらず漸々日數六十日程過て稍快氣も趣さしかを亭主と初五郎が臥床あ來り俎此度と手強き傷寒を煩らはれ難儀成れしあらん俎御病氣に付てと薬も多分お用ひ又人參をを進らせしが貴殿旅を掛てのとなれを餘金の持合せもあるはまければ

一應之は聞やなりと云れて初五郎の面目あげ何様推察の如く大金と所持致さず然り乍ら今爰に少し持合せ在ば不足なら是めて宜しく取計らひ給はるべしと云て新左衛門より貫ひし五兩の金子を出しければ亭主はさらば先是丈は貫ひや不足の處と何とぞ致さん何れ又後程と云捨て其場を立去り頼て醫師其外藥種屋等と呼び集め扱病人と斯様くの次第なりと段々のとを言て扱ひし處元來此亭主慈悲深之して平生人に能く思はれ居ければ皆々も忝能承知し一言の異議言ふ者も在ざりしより亭主と乃ち初五郎に斯と告しかを初五郎と亭主お厚之禮を述べ頼て其家を立出ける

○初五郎下野路よて覺へどなる事并百姓喜助親切の事

然るに初五郎六十日餘りの煩ひなれを歩行も心に任せず三町行ては休み二町行ては休み其上病氣に因て路用も皆遣ひ果しければ道々も人の門は立て食を乞なせし漸々一日に二里か三里つゝを歩みて辛くも三日路程來りし處俄の腰痛みて難儀しければ道端の大木に腰うち掛て稍一時計りも休み夫より杖に縋りて立んと爲にコハ何とぞ爲けん腰より下一向お冷て立事叶はず依て又暫く休み又立んとそれと足に覺在ざるも更に動くことを相成ねを初五郎是は哀しき哉何とて斯様難儀するかと身を揉頻りに急りけれ共足は益す冷痺れ遂も黄昏迄も癒ざりしおぞ餘儀な之此處に一夜を明しける扱翌朝になり村の百姓通り掛りに是を見て不思議に思ひ側へ寄り如何せしと尋ねれば初五郎私しとと奥州より相摸の小田原へ行者にておが堺の明神(白坂宿)にて傷寒を煩ひ六十日斗い絶食なし漸々此間肥立是まで参りしかども病後の故か一向足冷て起と能はず是に因て一夜を此處にて明しいと涙ながら

九廿

十三

あやけれを百姓之を開き見ばまた年若れ身を以て夫と誠に不便のときあり慨然の体にて在し
 杯と云ける其中にも喜助と云ふ者や様夫と病後お野宿を爲し故あらん然ば先此處にて養生
 致し本復の上打立べし小屋にて作り與へんとて夫より喜助は諸人よ勤め竹越杯近所より
 取寄せ自身先立ちて假舎を結び先初五郎をば此へ止置夫々の喜助と村中へ相談なし三度の
 食をも絶す運び萬事に心を付親切に世話をあしけれとせ此處と米不自由にて餘儀なく常も
 神計り宛行れしのを初五郎之を難儀に思ひ往來の旅人より一錢二錢の合力を貰ひ之にて子
 供等を頼み餅やど買て食し居たのしが扱初五郎お居るとも既に二年を越ゆ當年天正十七
 年にして齡も早十八歳と成けれ共腰は未だ勿く起す依て初五郎熟く思案するに替を尋ね
 るとせ當年おて早既に六年なり無事の身を以て諸國を經回りてさへ勿くお知れぬ者を斯く
 遣へど成て何時警よ回り逢ふとの在べき能く武運の盡たる我身かお親の替を討得せし
 て徒爾に鳥兔を送らんと不孝是より大いあるとなし所詮存命て甲斐お身なれを腹切て死
 んか然にても大坂お居給ふ母人には今日と首尾よく戻るの翌日と替討て歸るかを待詫居さ
 せ給ふも歎かとし又二ツににおかよ殿の斯と聞たらば無や本意なく覺すらん嗚呼我ながら
 思案お盡たり如何とせんと秒時と涙にかき暮しが又無常心の逼り來て母様おのよ殿の歎
 も然ることなるが寧ろ此世を早ふなし冥土に赴き亡父へ詫言なさんこと増ならんと思ひ出
 は勿くに心もそいゝる早其日より村人の運びて呉る食物をさへ弗り斷て喰せざるにぞ村童等
 此体を見て何必なく喜助の許へ告報せしかを喜助聞て不審し思ひ早速に初五郎の許へ相越
 し汝何かあれを食物を斷しやと問れて初五郎潜然として其は尋ねは然るとさながら僕れは嘗

一冊

所へ立越てより斯皆様方の厚きは恵みを蒙ふれども然と此病氣何時全快爲れども覺へやさ
 一生斯の如くにて望みを達せざるも叶ふまゝ然る時と皆様方への返禮を成難く生て甲
 斐なき身なりせば所詮一刻も早く餓死せんと夫を存じて斯と食を斷しとなれを切て死後と
 一遍の念佛稱へて下されたし仮令此身と土お成とも思の程と忘さやを願ふと此事の外
 いとねを只幾重にも許し下されと云ながら跡と涙お沈みけり喜助是を聞終りて成程夫も
 道理おとせ一度死して還らぬ者よ汝も未だ年若成れを適らぬと云ふとも有ま然る氣弱
 のとやさんより先く暫くは辛抱して其内少しにても適りたら其時汝の言ふ小田原とやらへ
 赴くべし死ぬなどいふとと呉る思ひ止まれかしと最親切に慰めて喜助は我家へ歸りける
 ○初五郎車を惠まる事并加藤幸助伊勢參宮の事
 斯て喜助村人を呼集めて相談なしけると此頃聞に彼の楚への非人と承らく村人の世話に成
 を氣の毒に思ひ絶食して死んと思ひ定めし由なるが彼若果お代官所へも届け其外埋む
 るとなを物入も掛るべき因ては寧ろ彼が無事なる中に幾許かの錢を持せ此村を拂ふよを宜
 からんと思ふさき此儀如何やと問ければ一同の者を成程夫が宜からん然ながら錢を持せ遣
 るとえ易けれと那の容おて追拂ふ手段有まじ如何して追拂ふやと云に喜助夫と渠小田原
 へ行たき望みの由なれば駕籠にては人を入に付渠が乗べき程の車を拵へ遣すべし足と利ね
 ど腕は達者なる故棒にて押行くと自由なり世の譬に佛千體作るより人の命を救へど云然
 と斯様にして遣さる第一功德にも成銘の爲にも宜るべしと理を説て聞せを一同も然ばと
 云て承知せしにぞ喜助は早速に車を拵へ頼て初五郎が前へ曳行さ是を見られよ上よと雨露

を防ぐ屋根もあり又押行棒も二本迄添て在る汝が望む小田原へ勿論京大坂長崎迄も此車にて押行時は自在あり是を今汝に遣はす間是に打乗り志ざす小田原へ赴くべし何時まで斯して在るも嘸事あらんと思ひ斯の計らひたり早速用意有べしと言れて初五郎と有が涙に咽び入り御禮は言葉に勿々盡されずさず然ば仰に従ひて御心入の車載のんと厚く禮を述べ頼みて其車に打乗り此村を去ると出行けれ斯て初五郎は道すがら食を乞ひ又と里の幼童杯も頼みて車を曳せ万苦を積で漸々小田原へ來り近邊を此處彼處尋ねけれ共更警の手掛りも無其内天正も早十九年となり文祿と改元して初五郎今年廿歳と成けれ共未だ警の行術少しも知れ此節初五郎思ふ様我家を出既八年及べ共未だ警の手懸りなし警を覘ふ者曾我兄弟の宮へ詣ずれど何時か之警に廻り遭ふとぞ聞及べり爰と幸ひ處も近し然ば富士の裾野へ立越て兄弟の宮へ詣でなを神の引合せあぞか無らんやと思ひ立しを吉日お翌日と云す其儘直に出行ける爰に又加藤幸助と過し天正十二年飯沼勘平を殺し又聞り昨めてお勝を殺し夫より南都へ行しが爰にも永く居兼轉じて奥州へ立越兄の許に居たりし處兄の妻お不義を仕掛け忽ち事顯れしかば是に因て又此處をも逐轉し遂に下野宇都宮へ行き從弟某しを頼みて先茲に七ヶ年の間爲とともなく居たりける然るに此土地の人々先年より伊勢參宮の講中を結び月毎に掛錢をなして毎年春と閏を引き當りし者參宮するとの定めめて幸助も此講に加入の事を勤められしが閏に當らむ參詣せでは相成ず敵持身の由なきととて始めの程と掛錢を出さ居たりし處此節に相あり熟々思ふ様我大坂を立退しより早八年より及びたれを今は我を付覗ふ者も最早念を絶て尋ねまじ然ば今年こそ伊勢講に加とり閏を引て當りあば參

宮すべしと思ひ立し是幸助の運の盡とぞ思われける因て幸助と世話人の許へ行き以來掛錢を出す間閏を引せよと頼みしに皆々承知し閏を引せたる處幸助が閏お當りしかを人々幸助と仕合者あり今年迄掛錢も致さるよ只一度閏を引て當りしとは是太神宮のは加藤成ん然と打立給ふ可とて夫々餞別あど致しけれを幸助と大いに悦び夫より心靜りに支度をあし頼て伊勢路を指し打立し處日を経て小田原れ宿へ着しけるに時しも黄昏のと成しが此日初五郎と曾我の社へ參詣あし小田原の宿外れまで戻りて車の中より行逢ふ人に一錢二錢の合力を乞居たる處幸助行懸りて常の非人と思ひ汝と躰への非人とな不便の者なり我今伊勢へ參詣するあれば功德の爲合力致し取せるありと首に懸たる錢四五十文取出し夫請取れと授け與へたるに初五郎有難ふと云あがら見れを錢の多死を不審して思はせ顔と打見やるに此年來尋ねし警幸助あれば發と驚き俯伏ひきたり然るに幸助は初五郎を幼年の時見し儘よて其上此節の体あれば見紛ふと云ふを道理なり實に初五郎曾我の宮詣でを志ざしたると神明の引合せとぞ思われける

○初五郎箱根へ車を押上る事 并並主計初五郎を見て不審する事

扱も飯沼初五郎は警幸助に出逢發と思ひけれ共曉られては一大事と素知らぬ顔して行過しが彼何れの旅に泊るのどて遠くより跡を付く行客る旅店の女共東西より出來り頼りに幸助を引止ける其中一人の女幸助を只ある旅店へと引入しを初五郎直此旅籠屋の門先へ車を付てと見たれと差當り何と爲べき様もなく氣をのり焦ちて内の様子あど窺ふ所旅籠屋にてと忽ち店の戸口を閉しけれを彌々討べさ手便無因て思案を運らすは斯ては容易のと

四冊

よてと討難し警は手足も達者なるも我之斯の如くの不具なれば所詮警難所も差掛りし時足
の惱みを付込で不意を討より外に有まらず夫には幸ひ彼箱根へ掛ると必定なれば我は是より
早く車を押上げ難所よて待受ん難所にて戦ふ我も百倍の利あるべし是屈竟の謀計ありと
思ひ付夫より箱根へ車を押上げ此處彼處と難所を尋ね廻りし内一方と深谷一方と藪竹生茂
り其上足場は岩角にて甚だ峻しき所有しかば茲こそ屈竟の場所と思ひ即ち此所へ車を停め
けるが又熟々と思ひ出すも斯まで辛苦は盡せども壁への身なれば反討に逢ふとも固り難
し年來の警に逢ひ乍ら晴ての勝負も出来ざるとと暗我身程武運に拙き者と有之然りなが
ら切てオ名乗合之上輕傷なり共一太刀試み夫を冥途への土産として亡父様や此世不在す母
人様への申譯せん斯る不具の身の是非無赦して給や亡父様ナウ母様よと暫時と泪に暮た
りしが其内に夜も早更て丑の半刻とも覺し頃ほひ一人の旅人大小巖窟合羽を若し火繩を
振つ、來りしが初五郎が泣居たる側へ直と寄て汝何者あれば夜更お滑る處を不待後ぞ疾名
乗れ盜賊の類よても有けるかと問れて初五郎私して壁の非人にて勿々盜賊をせにて候と
きと云ふ彼の旅人火繩を振り光り透して能く見れば言ふに違ふ事何にも壁への
非人にて有ければ然らる吾少し休息するあれば車を臨へ寄せ可とて夫より旅人と茲も暫く
休み居ける

○初五郎旅人お助太刀を頼む事并旅人姓名を明し助太刀を請合事

斯て初五郎の彼の旅人を熟々に見るお小兵あれ共顔色退ましく何一器量有べき様に見ゆ
ければ我も斯く有たらんにと警と勝負せんといと易ければ足腰の利ぬこと残念かれ今が今

五冊

とて此人を見る浦山しさとと思ひの餘り其貴所様には夜更て此山中を御通りなると何御
用有ての儀に候やと問けるに彼武士申様我は西國の者にて册疊の者と議論を致し圖らず浪
人と成夫より諸國を廻り歩行なり聞て這箱根の山中夜更お通れば妖怪の者出るとのに付
這土地へ來掛りしを幸ひ修行の爲斯様に夜更て通るなり然るに人の申て偽り妖怪らしき
者更に見當らせと聞より初五郎夫と近頃御浦山しさととなり這初五郎ども無事の體よても
ならむと思ふ云けるを旅人訝り即答め美ましと汝が足の不自由なる故我々の如く遠
者に成度思ひてなりやと云て初五郎仰の通り其御達者ある御浦山しく借夫に就て些御願
み申度との候が憚り乍ら御屈下さる、やと聞れて旅人は其轍を度と何事ぞ合力よても
致し與よと申のか非人と有む合力せぬと言ふにも非を然と懐中へ手を入るを初五郎否々
然様の義めては御座なく候と言ふ旅人は然らる車を曳下與よとやのいと聞きて初五郎の然
様にて無と云に旅人は借は何を頼むぞ何事なるの言て見よと言れて初五郎は然らる某し
申出さん然ながら必お御違背は下さるままやと言ふに旅人は暫時考へ仔細に寄てと假令
火水の中ぬり共引ぬ氣象の某しなれを随分願ひを叶へて了せんイヤ語るべしと言ひしかば
初五郎先と早速の御承引千万以て有難くは然ては包ます申上ん私に儀は親の儀を討者にて
其警今夜明にて此山中を越ゆる筈ゆゑ夜前より茲に來り待受ると雖も何と申も此形狀にて
と返り討に逢ふも圖られ難し然とて止まらるれ夫が爲茲にて扣へ候なり斯る次第おて
候程に御出合申たるこそ此身の幸ひ何卒助太刀して給えらば是を生々世々の御情けと眞實
を打明け頼ければ旅人一々聞了りシテ此方と何れの者にて又姓名を何と申さる、やと

六冊

聞れて初五郎之然ばあり某して太閤殿下御直參の御旗本飯沼勘平と申者の一子同苗初五郎
 元春と申者あり警討の証據はされ茲あど首懸たる片桐が添状の一札を取出し旅人の前あ
 差出せむ旅人は一札を讀終り然む其幸助と言者全く此處へ參るべきやと言に初五郎の如何
 あも小田原あて正しく見届け候間此處へ參ると相違なく候と言けむ旅人と護りて爲さ
 るい勇無死あり必き氣遣ひ爲給ふな急度助太刀致すべし斯様きと武者修業の身の望みな
 り我とと薩摩浪人松並主計と申者武士は相互に頼て幸助茲へ來らむ美事討て參らすべ
 しと流石丈夫の一言に今まで打萎れ居し初五郎も忽ち心勇み立夫より兩人夜明迎しと待掛
 たり斯て早東雲も近づけ人馬追々通行するよど主計初五郎に打向ひ往來の旅人も斯多け
 ば隨分見外し給ふなど云ふ内暫らく人絶て折々只一二人づゝ通るのみなれば主計は兎角氣
 を揉み出し若も今の内見外しはし給ふやと氣を付ると雖も初五郎何ぞ見外すとのあるべ
 きや只一心に向ふの方のみ見て居たりしが早日を三竿の高火に上りたれ共未だ來らざるあ
 ど主計は不審し何なれを斯延引あすぞ御身幸助が泊りし處覺のありやと云に初五郎は如何
 にも覺の居り候西側にて出外より二軒目にて有しと云主計と然らむ某し行て見來らん
 程も暫時待居給へと言つゝ籠へと走り行二軒目の宿屋へ行て窺ふよ這方は幸助急がぬ旅の
 習ひとして夜に俱に酒宴し殊の外寐過したる体にて今漸くと草鞋を穿立出る有様れば主
 計此体を見より急ぎ立歸り初五郎も只今二軒目の宿より六尺自りの大男出掛たり察する處
 是幸助に相違あしと思ふなれを最早間もなく來るべし用心せられよ飯沼氏見外すと有可ら
 ずと言て主計を手早く身支度をなし幸助の來るを今や遅しと待掛たり

○加藤幸助箱根山へ掛る事并初五郎主計の助太刀よて首尾能く復す事

扱も加藤幸助之夜前の酒氣未だ醒切ね共旅中のと故遅々ながら紺の合羽を着用あし腰おは
 長き大小を帶し笠を冠り草鞋を穿き緩々宿屋を立出頓て箱根山へと差掛り杖にもたれ山路
 を迎る足遅も休みての立ち立てと休み東西と見廻しつゝ來るを初五郎早くも見付け主計
 に向ひ彼奴こそ當の警加藤幸助なりと問よ主計心得たりと一刀提へ幸助が歩行來る向ふ
 へ立塞り大音に加藤幸助待と言ふ聲あ驚き幸助とコハ心得難き姓名呼はれ我名を知て止る
 汝と汗も何者よて又我に何用有てのとなるぞと云ば主計と呵々と打笑む我と松並主計と言
 ふ者あり此車の中に居ると飯沼初五郎元治とて汝が討し勘平殿の嫡男父の警を報せん爲め
 永年汝を尋ねし處今日今汝も出逢と雖も不具ある身故汝とは勝負相叶はま依て我に其助太
 刀を頼みたれば我今汝に立向ふなり率尋常不勝負せよ仔細に其身に覺有んと聞て幸助と
 如何にも正に覺有なり然乍ら見れば腰も立ざる不具者として我をば警と覘ふと片腹痛さ
 次第あり又其腰拔の助太刀する己れ等如きの弱腕者此幸助も二人三人掛りしとて何と爲べ
 死とも成まじし汝諸共討果し後善の根をば斷可と云主計は火と急立其大言と死でから
 言へ何程汝威かして言とも最早遁れぬ籠の鳥覺悟ひるげと言けれを幸助を心得たりと笠を
 脱合羽を取除け三尺二寸の大業物を抜放すにぞ主計も直ちに立向ふ此隙に初五郎も豫て自
 身拵へ置し竹片の弓を取出し早くも矢を番ひ年來の恨み一矢あり共受取れと切て放てを過
 ましたす其矢幸助が胸板に當り立けれを主計得たりと付入て矢庭に幸助が右の腕に切落せし
 どぞ幸助手早く左の手あて脇差を抜残念ありと切て懸るも主計翻然と身を變し又付入て左

七冊

りの腕を打落打落すされて流石の幸助早叶
 のしとや思ひけん宛然夜叉の荒たる如く血眼
 お成て主計が腕に喰付けければ主計直ちに襟と
 帯を正確と摺り力に任せて直と初五郎が車の
 前に曳摺り来り助太刀あそばさば腕をこそ打落
 したれ絶息の一刀早々其方刺れと聞と齊し
 く初五郎と思えず腰の立一のば是と不思議と
 自分ながら呆果暫時の物をも得言ざりし
 が本望遂し嬉しきまゝお吾身のとて差置て直
 ちお絶息をぞ刺たりける主計は悦ぶ事限りあ
 く出来されたり初五郎殿扱今迄も起ざる足の
 急に起しは不思議なり御邊今までは偽りしか
 と云れて初五郎の否々決して偽りやさぞ某し
 も誠に不審せしなり是と申し其方の御厚恩を
 受しに因年來の本望を達したる故嬉しさの餘
 り雖病の足も起しと覺ぬ御禮の程言語お争
 か盡し申さん此上共に宜しくと云に主計と然
 ら一刻も早く所の奉行に訴へんとて夫より兩



人打連立籠へ下り奉行所へとよそは急ぎけれ

○初五郎主計の兩人秀吉公の御前へ出る事并主計御直参になる事

斯て兩人は代官所へと出事の由を訴へければ早速役人の者兩人を引連れ檢使として立越委
 細を取調べて立戻り而して兩人を代官所へ留置き頓て大阪へ使者を立て此由言上致しけ
 るに折から秀吉公は朝鮮御征伐として肥州名護屋お御出陣在しければ早速貝塚堀太夫吉
 岡十兵衛と云る兩人先小田原へ下り二人を連れて直ちに名護屋へと赴ふさける時に文禄元年
 九月廿七日あり斯て貝塚吉岡の兩人は急ぎ太閤の御前へ出右の趣ふき委細申上し處飯沼松
 並の兩人を御前へ召出されとの由言上致すべき様仰有ければ初五郎乃ち段々の次第を言上
 なしけるお秀吉公甚だ感へ給ひ約束あればとて先知三千石と其儘外お二千石の御加増まで
 有て都合五千石下され名をも勘平と改むべき様仰せ付られしお初五郎は有難しと申て御
 請す次に松並主計と武士の節義を守り只一言の頼みお助太刀致したる段奇特なりとて新加
 千石賜り以て御直参と仰付らる然る程に兩人は天へも昇りし如く大いお悦び貝塚吉岡へも
 厚く一禮を述べ夫より御暇を願ひて大阪へ立歸り母に對面して諸事万端の物語りしけれ
 ば母の悦び譬へん方なく死したる者に逢たる如く餘りの嬉しさに亡父勘平并びお家臣十次
 兵衛の在ぬを打歎き急お佛壇に向ひ香華を手向暫くは稱名なして居たりける宿又松並を
 義心に因て思ひ寄す御直参となり高も千石頂戴しければ是より彌々飯沼と因み深く両家追
 々繁昌して美名を四方に響かせまは目出度かりける事共なり

○初五郎昔日の禮として所々へ立越る事并九十九家の娘おかよを妻を定る事

斯て初五郎之辛苦中所々にて憐情を感くれし者の方へ立越其恩を報ひんとて翌文祿二年の春に及び百日の御暇を賜り供人も數多召連れ五千石の格式にて大阪を打立ち先一番に谷十次兵衛が死せし奥州路ある川端の家に赴き老人未だ達者なるやと尋ねるに老人堅固にて有ければ大に悦び早速對面して段々の禮を述ける處老人と宛然我子の出世したる如くお思ひ暫し嬉し涙お咽び物をを得言す在此しかを初五郎乃ち白銀五十枚を遣し暇乞して別れる夫より奥州九十九新左衛門の方へ行飯沼利五郎元治立越たりと言入れけるに親子立出是こと驚死しの中も娘おかよと只夢の如くと思ひ傲し夢ならを覺さで欲や此夢をど起つ臥つ悦びしと道理とこそ見にけり斯て初五郎直と與へ通り先新左衛門夫婦と面會し是まで尽せし艱難辛苦を物語り其上段々の一禮を述べ縮緬十五巻と白銀百枚を取揃へ新左衛門の前へ差出しければ夫婦の者も甚く悦び夫よてこそ我等夫婦の眼違さざりし實に天晴なる御を哉とて或は感じ或は其辛苦を推察し頓て酒肴を用意し饗應しければ初五郎を大いに前酌し其夜之茲は宿りける斯て翌日となり初五郎新左衛門お打向ひ豫て御約束され息女と此方へ申受べし然乍ら拙者と當時殿下御直參の身あれば其方より直引取と成難く依て同老直參なる松並主計を里親と定め申可と云に新左衛門承知しければ乃ちおのよを連れ暇乞して立出夫より白阪宿の旅籠屋へ立寄り是へも厚く禮を述白銀五十枚を遣し又百姓喜助方へ行き是へは長く世話も成しとて喜助に白銀百枚村中の者へ二百枚禮を遣ししけるに百姓共は只々惘然果逃出す者あるも可笑ありし夫より小田原の代官へ廻り同老く禮を述頓て大阪へ立歸り松並氏を里親として目出度おのよを妻と定め中も睦敷暮しける其後年経頗と慶長三年太

問御他界となり同く五年石田三成家康公を討んとして關ヶ原より出陣し國々の軍勢變遷の如く大阪へ集りける

○飯沼勘平出陣の事并 池田備中守と組合最期の事

干時慶長五庚子歲大阪方にて石田治部少輔三成關東徳川家を打亡さんとて己れ首謀となり四國西國の大軍を催促し八月の下洗よりして濃州大垣の城に諸軍を築めける此折柄關東方より家康公上杉景勝征伐として野品小山お出陣せられ既大軍會津へ押寄んと爲時京地の細作より伏見の城落去し鳥居彦右衛門元忠討死せしと注進有しかば大いに驚死給ひ少將秀康公を會津の押へとして殘し置れ御身自ら軍を上方へと差向らる茲は飯沼勘平元春と無二の忠心と云ひ殊に故太閤の御恩を蒙ると海よりも深く山よりも高かりしかば此度の軍假令石田の發意と雖も既に幼君秀頼公の御爲と有に何のは以て猶豫べき諸軍勢と同じく大垣城に出陣し天晴大功を立先君の御恩を報ひんと思ひ關東勢も今や打掛らんと勇み居たりける折から岐阜中納言秀信卿にも大阪方となり木曾川を隔て東軍を支んと爲けるに大垣より援兵として諸軍打出しければ飯沼勘平を河瀬左馬介杯と同一く援兵と赴きし處早東軍逆巻く木曾川の流を押渡り岐阜城を只一揉みと押寄しかを飯沼勘平と最前より好敵もがなと見て有内より東軍の方より堤五郎兵衛大塚何某と云者進み出で堤と岐阜方ある前田平左衛門に渡り合ひ大塚と同一く武市善兵衛に立向ひしが堤は前田お討るゝと雖も武市の危く大塚に耐れんとす掛りたる處武市が舍弟忠左衛門と云者矢庭より馳來り大塚を目掛討て掛るに大塚是をととせせ右に支へ左に當る其内お直と入て遂に兄弟の物を見事に討果しけり

二十四

此体を見て岐阜勢誰一人討て出る者も無りある勘平倍社と思ひ其首還せ我請取ん我こそと大阪方名を得し飯沼勘平元春と言者なり還せくと呼りて鎧を小脇に抱込み駒座寄て相對ふに大塚も心得たりと駒立直し待間程あゝ兩人火花を散して戦ひけるが忽ち大塚突伏られ馬より墮と落たれを勘平も續いて馬より下り右手指を抜き水も溜らせ首揺落して立ちりし天晴豪勇の者と見ゆける斯て勘平は徐々引揚んとして遙か向ひの岡を見れば武者一騎扣へて在り續く兵有せと聽も武具の立派なるは必定名ある勇士あらんと思ひ駒在に進んで名乗懸けるが推量に違ひ此之池田備中守めて在ける備中守斯と見たり同之く鎧を合せんとするお郎等の伊東與兵衛なる者勘平が前に立塞り主従力を戮せ追つ巻りつ戦ふと雖も勘平少し恐るゝ色なく右に衝き左に當り既に主従今と危く見たる處に池田が軍勢忽ち四方より集り來り只一人の勘平を前後左右に取圍みしかば勘平勇なりと雖も多勢無勢支ふる由なく今は早是までと思ひ最期の一戦見よやくと呼り乍ら疾り立たる池田が勢を彼方へ切伏せ此方へ薙り頼て馬を一所に停め鎧を抜捨腹掻切て死たりと目覺しくも又天晴ありける振舞なり勘平當年廿九歳十三の時々辛苦を盡し父の怨敵を首尾よく討ち又思願の主家に忠義を尽し血氣盛りを散る花の身と爲しこそ復なき壯士と思これぞれ

箱根権現覺讎討畢

明治廿一年二月廿二日印刷
同 年三月一日縦刻出版御届

縦刻發行者

柳澤武運三

大阪府東區龍造寺町十八番地

原 版 者

覺張榮三郎

東京日本橋區本石町二丁目十六番地

印 刷 者

前野茂久次

大阪南區長堀橋筋二丁目六番地寄留

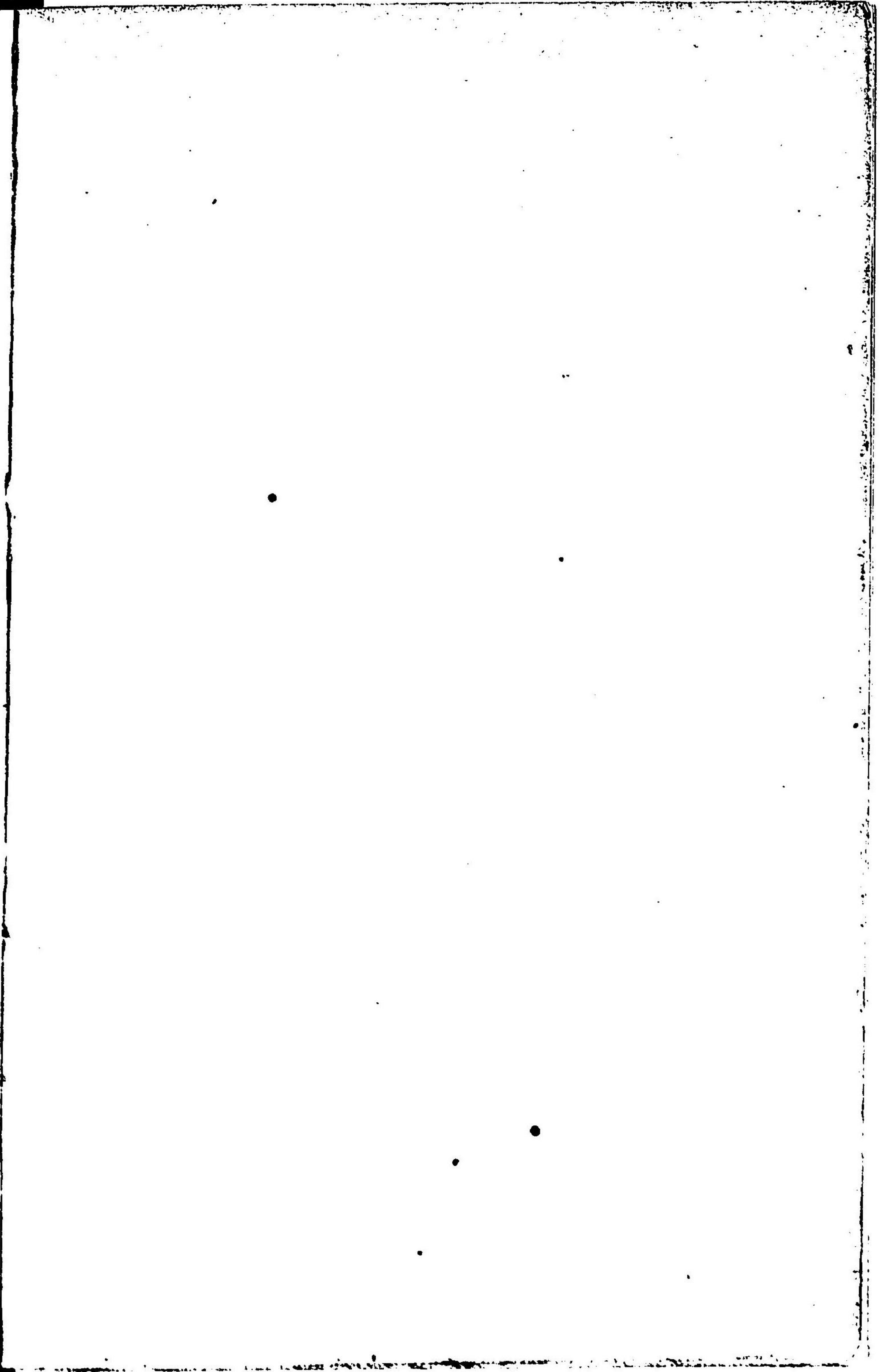
大阪心齋橋通安堂寺町南へ入

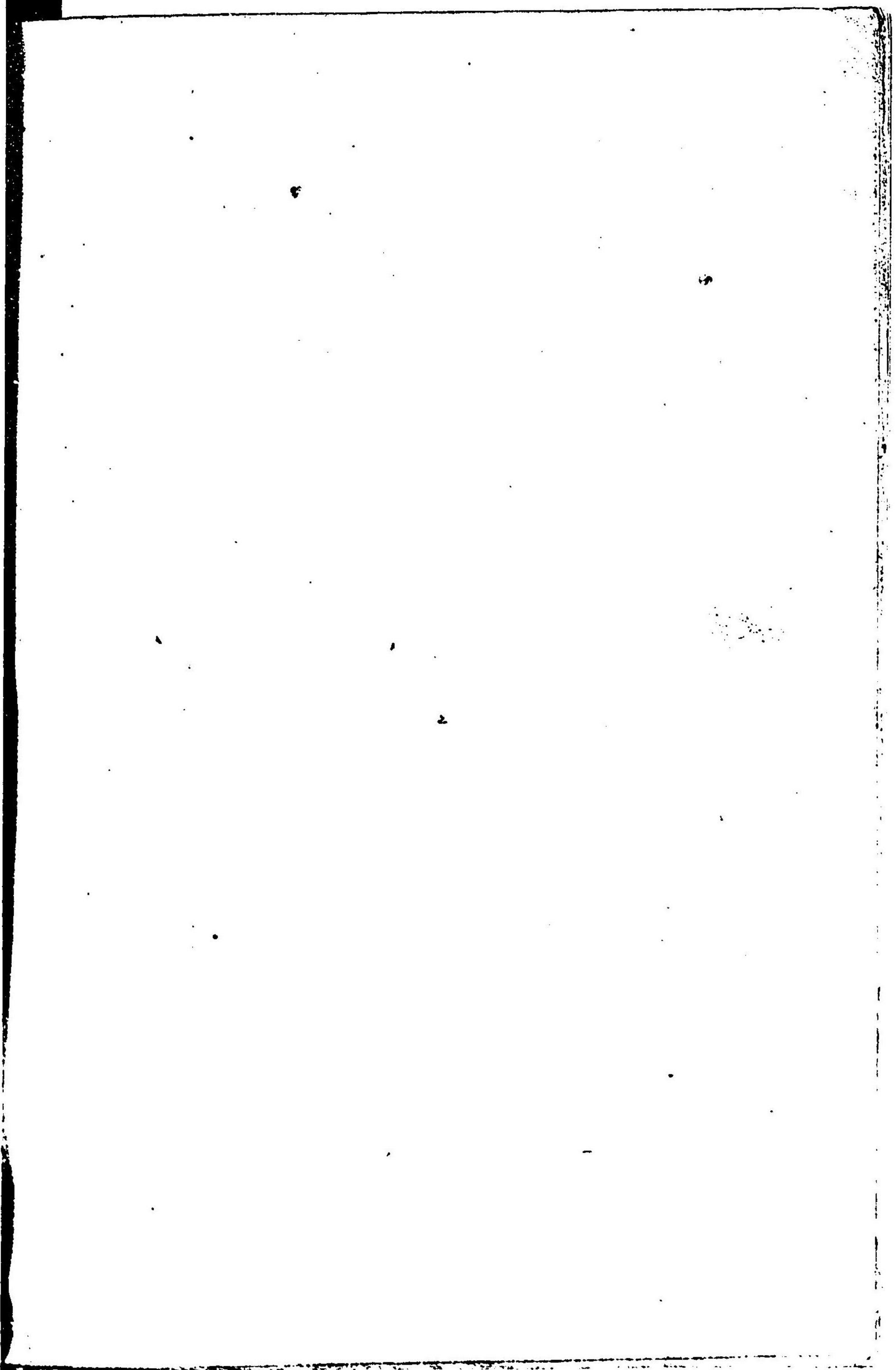
田中 太右衛門

大阪心齋橋通順慶町北へ入

此 村 庄 助

肆書捌賣





特 1

939

091243-000-6

特10-939

箱根権現躰仇討

福老館

M21

DBN-2097

